

コンベンション 新時代のリーディングあ 都市・札幌

会議などのために各地から多くの人が集まり、観光としての要素もあるコンベンションには、経済効果への期待という意味でも注目が集まります。積極的にコンベンション誘致を進める札幌市では、「札幌コンベンションセンター」を開設するなど開催地としての機能も整えています。センターのオープニング企画として平成15年11月に「フォトコンベンション」を主催した、株式会社北海道アート社の佐藤臣里さんにコンベンション都市・札幌についてお話ししていただきました。



株式会社北海道アート社

佐藤臣里(さとう・しげのり)さん

PROFILE

地域と写真をテーマにした仕事に携わる者として、写真がキーワードの企画を「コンベンション関連産業札幌ネットワーク」に提案。道内で開催される写真コンテストを一堂に集め、北海道の写真・ロケーションの見本市のようなコンベンションを開くというこの提案が最優秀を受賞し、「北海道フォトコンベンション2003」を主催・運営。

コンベンション都市としての機能

フォトコンベンションの開催地が札幌であるというメリットは確かにありました。まず、人口が多いという点です。多くの人、広い層の人に参加してもらえます。道



主催者側の予想を上回る12,500人の参加者

内の他地域では不可能な部分です。それと、「都市機能」と「土地の広さ」と「低廉な費用」の三つを兼ね備えている点です。約五千点の写真展示をしましたが、これも札幌だからできたことです。首都圏で札幌コンベンションセンターのような大きな施設を使用して同じ規模で開くのは、費用面で厳しいと思います。センターへの交通アクセスも決して悪くありません。ただ、出展者の中からは「地下鉄駅から遠い」との声もありました。センターの設備としてシャトルバスの運営があれば、利便性ももっと高くなるのではないのでしょうか。

コンベンションの受け入れ体制

センター設立前は、ホテルが中心となって札幌にコンベンションを受け入れる下地を整えてきました。これからは、センターとホテルがそれぞれの特長を生かした役割分担や、会場と宿泊施設としての組み合わせができるようになりますね。センターの魅力は、公設だからこその施設の大ささだと思えます。フォトコンベンションでも、会場を分散させずにすべてを一カ所に収められたのはセンターだからこそです。センターの設立で主催者に選択肢が増えたのは歓迎すべきことです。

また、コンベンションも観光も人を迎えるという意味では同じですから、観光地としてのおもてなしの心の足りなさが、コンベンション開催地としても出てしまうかもしれません。市民一人ひとりが自分の住む街に自信を持っているかどうか。それが訪れる人にも伝わってしまうのではないのでしょうか。今回のコンベンションを見て、「写真を本当に好きな人たちのイベントだと思つた。それが良かった」と言ってくださる方がいました。そういう気持ちの伝わり方が大切なのだと思います。

リーディング都市としての可能性

視察に訪れるたびにセンターでは大きな学会が開かれていましたから、稼働率は悪くないようです。これからの展望としては、夏場は道外から人を呼びやすいので全国的な学会を誘致し、あまり人が来ない冬



には道内のイベントを開催する。そういう、季節ごとの使い分けも必要だと思います。道外に向けては、札幌の環境の良さ

と組み合わせ誘致すべきですね。今回のコンベンション終了後に東京の協賛企業や雑誌社の方から、「開催時期をホワイトイルミネーションの時期に合わせれば、撮影も兼ねて本州からの参加者も増えるのでは」という話が出ていました。あとは、国際会議誘致が今後の課題でしょう。日本に呼んだコンベンションを、日本の中の札幌で開催するための要素。他都市との差別化は、やはり気候と食を絡めるべき、それが札幌らしさでもあります。アジアをターゲットとしても、札幌はアジア圏では珍しい北方都市の一つです。「涼しい札幌で会議を開きましよう」という呼び込み方法もあると思います。



フォトコンベンションを振り返る主催者と出展者

ットとしても、札幌はアジア圏では珍しい北方都市の一つです。「涼しい札幌で会議を開きましよう」という呼び込み方法もあると思います。